

2024年12月1日 第二礼拝

説教題「『友よ』と呼んでくださる方」マタイ福音書26章47～56節

主任牧師 加藤 誠

「イエスは、『友よ、しようとしていることをするがよい』と言われた。」(マタイ福音書26章50節)

今日からアドベントに入りました。「アドベント」とは「到来する」の意味です。「何が」やって来るのでしょうか。「神の救い」です。主イエスは宣教のはじめに「神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」と呼びかけました。「神の国」＝「神の救い、神の愛」が私たちのただ中にやってきた。神の救いと愛にしっかりと心を向けて「大切に受け取っていきなさい！」と呼びかけられたのです。聖書の人びとは「神の救いと愛がいつ実現する」のか、その日を具体的に知りませんでした。「神さま、すみやかに、あなたの救いが実現しますように！」と切実な祈りを日々重ねながら「その日を待ち望んだ」のです。それゆえ「アドベント」は、カレンダーの12月25日にしるしをつけて、「あと何日したらクリスマスだな」というように「なんとなく待つ時」ではありません。「今日、あなたの救いと愛が、わたしの上に、そしてわたしと隣り人の間に実現しますように！」と一日一日祈りを重ねながら、聖書を開いていく時であることを覚えたいと思います。

さてアドベントの第一主日の今日は、十字架において私たちにもたらされた「救いの希望」＝「主のゆるし」に心を合わせたいと思います。

今一緒に読んだのは、主イエスの逮捕の場面です。十字架につけられる前の晩、主イエスは弟子たちと最後の晚餐を共にし、祈るためにゲッセマネの園に出かけます。過越祭の間、エルサレムに滞在中、主イエスと弟子たちは毎晩ゲッセマネの園で野宿をして夜を過ごしていたようです。そのことを知っていた弟子のユダが、祭司長や長老たちの手下たちを引き連れてやってきたのです。どの男がイエスなのか。ユダは前もって合図を決めていて「自分が接吻する人がその人だ。それを捕まえろ」と打ち合わせていました。友人同士の「接吻」は日本人には馴染みがありませんが、欧米の人びとの間では日常の習慣のようです。お互いの頬にするのは友情や家族の親愛のしるし、大人が子どもの額にするのは小さな者を見守る愛情のしるし、身分の高い人の前でひざまずいて足にするのは謙遜と服従のしるしなど。主イエスと弟子たちも、友愛のしるしとして普段からお互いに頬を寄せて挨拶していたのでしょうか。しかし、その友愛のしるしが裏切りのしるしとなったのです。つい数時間前までユダは主イエスと一緒に食卓に座り、主イエスが「これはわたしの身体であり、わたしの血だ」と手渡されたパンと杯と受け取った男が、「こちら側」から「向こう側」に移り、今やイエスを逮捕する先導役としてやってきたのです。

ところが驚くべきことに、そのユダに向かって主イエスは「友よ」と呼びかけられます。ふつうなら「裏切者よ」と呼ぶべきところでしょう。主イエスはいったいどのような思いで「友よ」と呼びかけたのでしょうか。マタイ福音書を開くと、同じ「友よ」という言葉が譬え話の中で二回用いられています。一つは「ぶどう園の労働者のたとえ」（マタイ 20 章）で、朝からぶどう園で働いていた者たちが、夕方にやってきてちょっとだけ働いただけで自分たちと同じ賃金をもらった者たちへの不満を述べた時に、主人が「友よ、あなたに不当なことをしていない。自分の分を受け取って帰きなさい」と語りかける場面。もう一つは「婚宴のたとえ」（22 章）で王から招かれながら礼服を着ないで来た者に、王が「友よ、どうして礼服を着ないでここに入ってきたのか」と語りかける場面。いずれも、神の恵みと慈しみの深さが理解できずに不平を抱いている者たちへの語りかけです。ユダもその一人と言ってよいでしょう。神の恵み、慈しみ、愛が理解できずに不平不満を抱いている、弟子として不出来な者。その不出来な者に主イエスは「友よ」と呼びかけるのです。聖書学者の中には「この友よという呼びかけには皮肉が込められている」と解する人もいます。でもそうでしょうか。主イエスは十字架の上で自分に唾を吐きかける者たちのことを祈ってくださいました。主イエスの真意を理解できずに祭司長たちに売り渡してしまった愚かなユダを「裏切者！」という非難と皮肉を込めて「友よ」と語りかけたのでしょうか。主イエスはこのあと「このすべてのことが起こったのは、預言者たちが書いていたことが実現するためである」（56 節）と語られて、ユダの裏切りの背後に神の御心を見ておられることがわかります。そのことを思うとき、ユダに向かって語られた「友よ」という呼びかけには、十字架に向かう主イエスの深い決意と覚悟が、そして裏切者ユダへの深い愛とゆるしが込められていたと受け取るのです。

この主イエスの「友よ」という呼びかけは、今日も十字架の上から私たち一人ひとりに向けられている呼びかけではないでしょうか。私たちはどこかユダだけを「裏切者」と特別視しますが、今日の場面の一番最後はこういう言葉で結ばれています。「このとき、弟子たちはみな、イエスを見捨てて逃げてしまった」（56 節）。私たちがどんなに主イエスに深い愛と信頼を寄せていたとしても、次の瞬間どうなるかわからない弱さを抱えている一人ひとりではないでしょうか。それにしてもこの時ユダはいったいどんな思いで主イエスの呼びかけを聴いたのでしょうか。私たち人間の罪深さは「頭では分かっているのに、やめられない弱さ」であり「後にならないと自分のしでかした罪の大きさに気づけない」ところにあります。しかし、その愚かさに沈む私たちを今日も主イエスは「友よ」と呼びかけ続けてくださっている。この方がいてくださるゆえに、私たちはどんなに自分の罪と弱さに打ち砕かれても、なお神に向かって歩み直していく希望に立ち上がらせていただけるのです。